

2019年11月20日(水)

天理大学ふるさと会海外研修報告書

天理大学大学院2年次生 篠原 哲也

1. 期日

令和元年9月1日(日)～9月8日(日) 8日間

2. 渡航先

アメリカ合衆国 ニューヨーク州

3. 研修目的

- ①テニス種目の世界四大大会であるUSopenの大会会場におけるインタビュー調査により、ソフトテニスの世界的な認知度を明らかにすること。
- ②男女ソフトテニス部外部コーチとして、世界で活躍するプレーヤーとそのコーチが互いにどのようなアプローチをしているのかを生で見ることにより見聞を深めること。
- ③世界を見ることにより、将来自分がどのようにして社会に役立つ人材となるのかを、様々な場所に足を運ぶことによってより深く考えること。

以上の目的を持ち研修に臨みました。

4. 行動記録

9月				
1日	伊丹13:10発	4日	トランプタワー	
	JFK 16:35着		セントラルパーク	
2日	ニューヨーク市立図書館本館		ジュリアードスクール	
	タイムズスクエア		ブルックリンブリッジ	
	ロックフェラーセンター		メトロポリタン美術館	
	セントパトリック大聖堂		グッゲンハイム美術館	
3日	ワールドトレードセンター		5日	U.S OPEN 試合観戦・調査
	ブロードウェイ		6日	
	バッテリーパーク(自由の女神)	7日		
4日	トップオブフェラー	8日	JFK12:00発 伊丹19:10着	

図1 主な行動記録

5. 研修内容の報告と成果

この度は、「天理大学ふるさと会海外研修助成制度」を受け、多大なる助成金の援助により、現地へと足を運ぶことができ、無事研修を終えることができました。また、今回の研修までに、多くの方々にご協力頂きました。天理大学ふるさと会、並びに国際交流センターの先生方をはじめ、沢山のご協力頂きました方々に、心より御礼申し上げます。

以下、渡航先であるアメリカ合衆国のニューヨーク州での行動記録とともにその成果などについて報告します。

【1日目】

私はこれまで海外経験がかなり少なく、本年4月に台湾で開催された国際身体学会での発表の機会が初めての国外進出でした。そのため、2度目の海外経験がアメリカ合衆国ニューヨーク州ということでかなりの緊張と興奮の中、渡航日を迎えました。今回の研修の主な目的は、USOpen 会場でのインタビュー調査であり、頭の中はそのことでいっぱいでした。また、ネット上で見る会場や試合の風景と実際自分の目に映る景色がどういったものなのかを想像し、それらを楽しみにアメリカ行きの便に乗ったことを覚えています。

私がアメリカ合衆国に到着した現地時刻は、夕方の16:35でした。到着後、宿へすぐに向かいチェックインを済ませ、身体を休ませました。



図2 ホテルの最寄り駅



図3 最初に撮った景色

【2日目】

渡航2日目は、①ニューヨーク市立図書館、②タイムズスクエア、③ロックフェラーセンター、④セントパトリック大聖堂へ足を運びました。町並みを拝見するために、全て徒歩で回りました。私の中で2日目に最も訪れたいと考えていた場所は、③のロックフェラーセンターでした。ロックフェラーセンターは、マンハッタンの中心部ともいえる場所に位置し、19の商業ビルが四方に建ち、その各ビルの低層階は一つの建物として繋がっています。また、一番大きなビルの高さは259mの70階建てです。私がこのロックフェラーセンターに行ってみたかった理由は、国際連合加盟国の旗用ポ

ール 200 本の中にある日本の国旗を目にしたいと考えていたからです。

私はこの大学院に来て以来、自分が将来どのように日本の社会に役に立ちたいのかを明確に持つことができました。このロックフェラーセンターにそびえる日本の国旗を見ることで、再度自分の気持ちを再整理したかったのだと思います。実際、200 本の国旗の中にある「日の丸」を見つけることができた時に、自分の目標や意志が定まっていることを確認することができました。今後の自分と向き合うための、非常に貴重な機会になりました。

また、私が天理大学に在籍中に天理教の教えを習い、少しではありますが知識を持っていたことから、アメリカの主な宗教であるキリスト教の教会にも足を運ぶ中で、信仰する宗教による文化の違いなどにも興味を持って回ることができた一日でした。



図 4 ロックフェラーセンター



図 5 セントパトリック大聖堂

【3日目】

渡航 3 日目は、主に①ワールドトレードセンター、②ブロードウェイ、③バッテリーパークへ行きました。3 日目の目当ては、①のワールドトレードセンターと③のバッテリーパークです。

ワールドトレードセンター（以下、「WTC」とする）はとはその名の通り、世界各国との貿易取引を担う非常に重要な施設です。この WTC は以前、ツインタワーと呼ばれた世界一高いビルでしたが、「アメリカ当時多発テロ事件」の影響によりビルが崩壊した。そのため、今回目にしたビルは、テロ以降に建設された「新・ワールドトレードセンター」でした。私が WTC を訪れたたいと考えた理由は、2 日目に記載した自分の将来に関する意志を固めるためでした。私は、大学院を卒業後、約 1 年間カナダに留学する予定です。というのは、私が将来仕事にしたいと考えていることが、私の周りにはいる人々の生活を支えている「物」をトレードする仕事です。いわゆる、貿易職というものです。昨年からこれまで約 1 年半の間、留学と研究のために語学を勉強してきました。カナダでは、この職種に必要な英語の定着と国際貿易資格である FITT の勉強を通して、世界の貿易に関する知識を習得する予定です。これらの目標を実現させるための意志決定として、アメリカ合衆国の WTC に足を運んできました。

次に、③のバッテリーパークについて報告します。バッテリーパークとは、ニューヨークのマンハッタン島南端のバッテリーに位置する公共公園です。ここでは、船に乗り、有名な自由の女神やエリス島に行くことができます。やはりニューヨークへ足を踏み入れることができたのだからと、少し観光目当てで訪問しました。バッテリーパークに到着し、チケットを購入し、手荷物チェックを受け船に乗ったときはまだ少し浮かれた気持ちでいましたが、船に乗り「自由の女神」を目の当たりにした際、今回の研修における目的が何なのかを再認識し、有意義な研修にしようと心に決めたことを覚えています。



図6 ワールドトレードセンター



図7 自由の女神像

【4日目】

4日目は、①トップオブフェラー、②トランプタワー、③セントラルパーク、④ジュリアードスクール、⑤ブルックリンブリッジ、⑥メトロポリタン美術館、⑦グッゲンハイム美術館を中心に各場所へ足を運びました。4日目の目当ては、⑤ブルックリンブリッジでした。

ブルックリンブリッジは、アメリカ合衆国ニューヨーク市のイースト川をまたぎ、マンハッタンとブルックリンを結ぶ橋です。全長約1,800m、幅25.9m、高さ（平均高潮面上）84mの橋で、1883年に建設された歴史深い建設物です。

私の出身地である滋賀県には、日本一大きな湖である琵琶湖があります。その琵琶湖には、滋賀県の県庁所在地である大津市と東側に位置する守山市を繋ぐ琵琶湖大橋が架かっています。琵琶湖大橋は、全長約1,400mであり最高地点では水面から140mの高さで船舶が航行できるようになっており、滋賀民の生活を支えている重要な役割を担う橋です。橋の規模大きく異なりますが、ブルックリンブリッジも琵琶湖大橋と同様に現地の人々が生活を営むための重要な建設物だと知ったため、興味を持ち実際に歩いて渡りました。実際に渡ってみると、歩行者や自転車に乗った一般尾方々や観光客まで様々な目的を持った沢山の方々が橋を利用していました。また、橋には観光目的で橋を運ばれた方々が、ブルックリンブリッジに足を運んだ記録として橋に名前を書いたり、名前を書いた南京錠を掛けたりと琵琶湖大橋では見られない眺めがそこ

にはありました。人々がその橋を利用する経緯などにはさほど大きな違いがあるとは感じませんでした。しかし、琵琶湖大橋は主にコンクリートが主な材料であるのに対し、ブルックリンブリッジは木材とレンガが主な材料であり、橋の設計や用いる材料などは国やその土地の文化など様々な背景が影響しているのだなと感じました。



図8 ブルックリンブリッジと歩行者

【5日目】

5日目は、今回の研修目的である「ソフトテニスの認知度とこれから」に関するインタビュー調査を実施しました。

USOpen 大会会場である USTA ナショナル・テニス・センターに 6:30 頃到着し、前半 7:00am-11:00am は大会会場入り口で、後半 11:00am-5:30pm は会場施設内でインタビュー調査を実施しました。調査対象人数は、前半 25 名、後半 25 名の計 50 名をを予定しており、予定通り 50 名から回答を得ました。インタビュー内容は、①ソフトテニスというスポーツを知っていますか、②（①知っている人に対して、）将来、ソフトテニスはオリンピック種目になると思いますか、③（②に対して、）なぜそのように考えますか。の 3 項目です。私の立てた個人的な仮説は、①「知っている 3 : 7 知らない」、②「なる 0 : 10 ならない」でした。①の理由は、テニスの世界的に有名な大会に足を運ぶほどのテニス愛好者が集まっているため、テニスをベースに作られたソフトテニスを知っている人は少なくないと考えたからです。また、②については、ソフトテニスの起源は教育が目的であることから、根底にある教育的意義に対し、結果がモノを言う勝利至上主義というワードがソフトテニスの起源との矛盾を生むのではないかと考えたことから、これらについてテニス愛好者の方々はどのように考えるのか、意見を求めるための質問項目として用意していました。③では、②の理由を掘り下げて聞くための項目です。調査の結果は驚くべきものでした。①「知っている 1 : 49 知らない」、②「なる 0 : 10」、③「競技人口が少ない」という結果で、特に①の結果には驚きを隠せませんでした。しかし、今回の結果はかなり面白く価値のあるデータだと考えています。日本ソフトテニス連盟が「ソフトテニスをオリンピック種目に！」と改革運動を行っていることを耳にしたことがあります。現実はかなり厳しく、多くの課題が

あることを今回の調査を通して実感しました。また、この結果から、日本という列島が世界にとってどれほど小さなものなのかも考えさせられました。

話は5日目の冒頭に遡りますが、この日は非常に災難な一日でした。インタビュー調査のために用意していた用紙（予備を含む）が朝の雨風で水浸しになり使いものにならなくなったため、現地に持って行っていた英語勉強用ノートでインタビューを実施するはめになりました。また、インタビュー後に女子のダブルス決勝・女子シングルス準決勝（7:00pm）のチケットを購入しており、観戦する予定でしたが、体調不良になり、試合を見ることができませんでした。しかし、少ない対象者数ではありますが、今回のインタビューからソフトテニスの認知度を知ることができ、実のある一日を過ごせたのではないかと考えています。



図9 USOpen 大会会場入口



図10 インタビュー実施の中心地
(アーサーアッシュスタジアム前)

【6日目】

6日目は、世界で活躍するプレーヤーとそのコーチが互いにどのようなアプローチをしているのかを生で見るにより見聞を深めることを目的とし、間近で選手とそのコーチがコミュニケーションをとっている姿を見るために選手の練習コートに足を運びました。はじめに私が目にした選手は、現在世界ランキング2位のラファエル・ナダル選手でした。次に、準々決勝で世界ランキング3位のロジャー・フェデラーを破った若手選手であるグリゴール・ディミトロフ選手。3人目に、世界を代表する女王のセリーナ・ウィリアムズ選手。そして最後に、世界ランキング4位のダニエル・メドベージェフ選手の計4名の練習姿を拝見することができました。

はじめに、4名の選手とコーチのやりとりに関する共通点について挙げていきます。私が感じた大きな共通点は、練習中、コーチは常に選手のすぐ近くに位置し、選手に対して幾度と声を掛けていました。これは一見当たり前かのように思われますが、私の知るプロの世界は、要所的確な助言を行い、それほど多くのことを伝えないのが当たり前だと認識していました。実際に私が全国大会や国体の舞台に立つ前日にコートで練習をする際、多くのことを言われても素直に耳に入ってきませんでしたし、自分の課題に意識が向き、周りの助言は聞いてはいるのですが右から左へ流れてしまっ

ている状況でした。これがプロとアマチュアの「差」なのかもしれないと痛感した瞬間でもありました。話を戻しますが、私のプロスポーツにおける選手とコーチの距離感は、限られた瞬間や選手のニーズに応えるときだけのものでしたが、実際の現場では、多くの助言を多岐にわたって行っているのが現状としてありました。これは、常日頃から、長い年月を共にしている二人だからこそ保てる距離なのかなと感じましたし、選手との関係をしっかりとしたものにするためには、選手一人ひとりに寄り添い、個に応じた指導や助言の実現が不可欠であるという考えに至りました。

また 4 選手の選手とコーチのやりとりにおいて異なる点は、練習中における場の雰囲気づくりでした。ラファエル・ナダル選手とダニール・メドベージェフ選手のコーチは、コンスタントにアドバイスを行う中で笑顔などはほとんどなく、コーチが一方的に話し掛けており、両者の会話は練習の前後ぐらいのものでした。一方、グリゴール・ディミトロフ選手とセリーナ・ウィリアムズ選手の練習では、笑顔の会話がよく見られ、非常にリラックスした雰囲気の中で練習が行われていました。追々考えてみると、前者と後者では、前者は試合を翌日に控えており、後者は翌々日と時間に余裕があることが関係していたのではないかと考えられました。しかしこれらは非常に重要なことであり、これまで行ってきた練習内容や課題を常に意識させるためにコンスタントに声かけを行うことで技術や戦術を再確認させたり、選手をリラックスさせるために上手く顔の表情を幅広く使い分けることで選手の感情をコントロールし、その選手に合った練習環境を整えていたのだと感じました。今回、この現場に足を運ぶことができたことで、多くの収穫と再確認をすることができたのではないかと考えています。



図 11 アーサーアッシュスタジアム内

6. まとめ

この度、アメリカでの研修を通して、私の人生における非常に貴重な経験をさせていただきました。今後の大学院生活と自分の将来について深く考え行動するためのきっかけを頂きました。天理大学ふるさと会をはじめ、海外研修にご協力いただきました全ての方々に、心より御礼申し上げます。